

Title	建礼門院右京大夫の物語享受：『狭衣物語』を中心に
Author(s)	丹下, 暖子
Citation	詞林. 2023, 73, p. 36-47
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90836
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

建礼門院右京大夫の物語享受

——『狭衣物語』を中心に——

丹下 暖子

一、建礼門院右京大夫と物語

建礼門院右京大夫は、平安末期から鎌倉初期という社会が大きく変化してゆく時期を生きた女性である。その家集『建礼門院右京大夫集』（以下『右京大夫集』）には、建礼門院徳子に仕える日々の中で詠んだ和歌や、源平の動乱により失った恋人、平資盛を追慕する和歌が収められているが、その一部に『源氏物語』を中心とした物語との関わりが見られる。以下は『源氏物語』そのものに言及した場面である。

……さすが積もりにける反古なれば、多くて、尊勝陀羅尼、何くれさらぬことも多く書かせなどするに、なかなか見じと思へど、さすがに見ゆる筆の跡、言の葉ども、かからでだに、昔の跡は涙のかかるならひなるを、目もくれ心も消えつつ、言はむ方なし。その折、とありし、かかりし、わが言ひしことのあひしらひ、何かと見ゆるが、かき返すやうに覚ゆれ

ば、ひとつも残さず、みなさやうに認むるに、「見るもかひなし」とかや、源氏の物語にあること、思ひ出でらるるも、「何の心ありて」と、つれなく覚ゆかなしさのいとどもよほす水茎の跡はなかなか消えねとぞ思ふ（二二九）

かばかりの思ひに堪へてつれもなくなながらふる玉の緒も憂し（二三〇）

資盛の戦死の報に接した右京大夫は、深い悲しみの中、「後の世をばかならず思ひやれ」（二二八詞書）という資盛の言葉を思い出す。菩提を弔おうと、資盛の手紙を写経の料紙として漉き直させたが、筆跡が目に入ってしまう。このとき、右京大夫が思い浮かべたのは「見るもかひなし」とかや、源氏の物語にあること、すなわち『源氏物語』幻巻、出家を前に源氏が紫の上の手紙を処分する場面であった。

いとうたて、いま一際の御心まどひも、女々しく人わらくなりぬべければ、よくも見たまはで、こまやかに書き

たまへるかたはらに、

かきつめて見るもかひなし藻塩草おなじ雲居の煙と
をなれ

と書きつけて、みな焼かせたまひつ。

〔源氏物語〕幻 ④五四八頁

このように『源氏物語』そのものに言及する形のほかに物語との関わりは見られる。右京大夫は『源氏釈』を著した藤原伊行の娘。『源氏物語』をはじめとした物語に精通していたはずで、家集編纂にあたって物語を用いたと考えられるが、そもそも、右京大夫にとつて物語とはどのような存在であつたのだろうか。

例えば、『蜻蛉日記』は、その冒頭で「古物語」を「それごと」とする。そして、撰閲家の貴公子との結婚という自らの希有な経験を、物語とは異なる「日記」として書くのだと宣言する。

かくありし時過ぎて、世の中にいとものはかなく、ともかくにもつかで、世に経る人ありけり。かたちとても人にも似ず、心魂もあるにもあらで、かうものの要にもあらであるも、ことわりと思ひつつ、ただ臥し起き明かし暮らすまに、世の中に多かる古物語のはしなどを見れば、世に多かるそれごとだにあり、人にもあらぬ身の上まで書き日記して、めづらしきさまにもありなむ、天下の人の品高きやと問はむためしにもせよかし、とおほ

ゆるも、過ぎにし年月ごろのこともおぼつかかりければ、さてもありぬべきことなむ多かりける。

〔蜻蛉日記〕上巻 八九頁

『右京大夫集』には、『蜻蛉日記』のように物語に対する認識を明確に語る部分はない。だが、『右京大夫集』も『蜻蛉日記』同様、その冒頭で自らが書こうとするものが何であるかを述べようとした作品である点に注目される。

家の集などいひて、歌よむ人こそ書きとどむることなれ、これは、ゆめゆめさにはあらず。ただ、あはれにも、悲しくも、何となく忘れがたく覚ゆることどもの、その折々、ふと心に覚えしを、思ひ出でらるるままに、わが目ひとつに見むとて書き置くなり。 (一番歌詞書)

傍線部に対し、謙遜の姿勢を読み取る見解や、「あくまでも私的なものであって、公的のものではないという態度を明らかにしている」といった指摘もあるが、同時に、自らが書こうとするもの——和歌そのものよりも長文化してゆく詞書のほうに重きを置く作品——が通常の「家の集」とは異なることをも述べようとしていると解される。通常の家集から逸脱し、長文の詞書で余すことなく書き残したのが、源平の動乱に端を発する希有な経験であることは言を俟たない。

冒頭にこのような序に相当する文章をもつ『右京大夫集』や『蜻蛉日記』の作者たちは、自らの希有な経験を書き残すにあたり、どのような形式をとるかという問題に自覚的で、

先行する作品を強く意識していたものと思われる。『蜻蛉日記』では「日記」と対比する形で「古物語」に言及していたが、『右京大夫集』では物語をどのように捉え、享受しているのだろうか。特に右京大夫は、源平の動乱による恋人の戦死と社会の変化という希有な経験をした女性である。苛烈な現実を目の当たりにした女性が、物語という「そらごと」の世界をどのように見つめていたのか。この点に注目しながら、右京大夫の物語享受について考えてみたい。

二、『建礼門院右京大夫集』と『狭衣物語』

『右京大夫集』が『源氏物語』の影響を受けていることは先の例から明らかだが、『源氏物語』以外の物語についてはどうだろうか。本稿では、『右京大夫集』研究においては看過されてきた感のある『狭衣物語』を取り上げ、右京大夫の『源氏物語』享受、ひいては物語享受の問題を考える手がかりとする。

『右京大夫集』と『狭衣物語』の関わりを考えると、注目されるのは、以下の小宰相と平通盛の恋、及びその顛末に言及した場面である。

治承などのころなりしにや、豊の明りのころ、上西門院女房、物見に二車ばかりにて参られたりし、とりどりに見えし中に、小宰相殿といひし人の、鬢額のかかりまで、ことに目とまりしを、年ごろ心かけ

て言ひける人の、通盛の朝臣に取られて、嘆くと聞
きし、げに思ふもことわりと覚えしかば、その人の
もとへ、

さこそげに君嘆くらめ心そめし山のみちを人に折られ
て（一六五）

返し

なにかげに人の折りけるもみち葉を心移して思ひそめけ
む（一六六）

など申しし折は、ただあだごとこそ思ひしを、それゆゑ底の藻屑とまでなりしを、あはれの例なさは、よそにて嘆きし人に折られなましかば、さはあらざらまし。かへすがへす例なかりける契りの深さも、言はむ方なし。

和歌の贈答そのものは、小宰相に思いを寄せていたが、通盛にとられて嘆く男を右京大夫が慰めたというものである。注目すべきは『右京大夫集』編纂時の視点で記された左注部分で、源平の動乱のさなか、戦死した通盛を追って入水した小宰相のことを「底の藻屑」となつたと表現している点である。この「底の藻屑」は、『狭衣物語』では小宰相同様、入水した飛鳥井の女君を指す表現なのである。

『狭衣物語』において、飛鳥井の女君の入水は次のように描かれている。

乳母に欺かれ、筑紫行きの船に乗せられた飛鳥井の女君は、

狭衣の従者・道成の求愛に絶望し、虫明の瀬戸で入水を考える。このとき、女君は狭衣との子を宿していた。入水を前に、女君は狭衣の形見の扇に和歌を書きつける。

いみじき心惑ひにも、硯をせがいに取り出でつつ、この扇に物書かんとするに、目も涙にくれ、手もわななかるれど、

早き瀬の底の水屑になりにきと扇の風よ吹きも伝へよ

とも言ひ果てず、人のけはひのすれば、落ち入りなんとて、海の底をのぞく。ただ、かばかりにてだにも、いと恐ろしきに、わななくわななくうつ伏したまふめりとぞ。

〔狭衣物語〕巻一 一五二―一五三頁

「早き瀬の」は、入水して「底の水屑」となったことを狭衣に伝えるよう、扇に呼びかけた歌である。後にこの扇を見た狭衣は、入水した女君を思い、「底の藻屑」と表現している。

この扇は見知りたりけるなめり、あはれ、いかばかり思ひけんと思しやらるる涙の水脈になりぬべし。

唐泊底の藻屑も流れしを瀬々の岩間もたづねてしがな

〔狭衣物語〕巻二 二五三―二五四頁

「底の藻屑」あるいは「底の水屑」は、その後も狭衣が入水した飛鳥井の女君を思う際の表現として用いられる。

① かの底の藻屑をだにあらましかば、あなづらはしき私ものにて常に見あつかひ、心を慰めましものを、言ふ

かひなきわざなりや……

〔狭衣物語〕巻二 二五九―二六〇頁

② かの底の水屑も思し出でられて、ただかばかりの深さだに思ひ入りがたげなるを、いかばかり思ひわびてかなど……

〔狭衣物語〕巻二 二九七頁

③ 「さらば、この底の水屑のゆかりなりけり」といみじうあはれにて……

〔狭衣物語〕巻二 三〇二頁

①は、あの「底の藻屑」さえ生きていくれたならと、入水した女君を思い、涙する場面、②は、吉野川の水量から女君の入水を連想する場面である。③では、女君の兄を「底の水屑のゆかり」と表現している。『右京大夫集』において小宰相の入水を記すにあたり用いられた「底の藻屑」は、『狭衣物語』では（入水した飛鳥井の女君）を象徴する表現であったことが分る。

ところで、『右京大夫集』には、小宰相のほかにも入水した人物に言及する場面がある。

また、「維盛の三位中将、熊野にて身を投げて」とて、人の言ひあはれがりし。……（二二五・二二六番歌詞書）

資盛の兄・平維盛の入水を耳にした場面であるが、「身を投げて」と直接的に表現している。維盛の入水について詠んだ和歌も「春の花の色によそへし面影の空しき波の下に朽かぬ」（二二五）、「かなしくもかかる憂き目をみ熊野の浦わの波に身を沈めける」（二二六）で、直接的な表現である。

こうした維盛の入水に対する表現と比べると、「底の藻屑」は意図的な表現であったと見るべきで、小宰相の入水を語る『右京大夫集』の左注部分は『狭衣物語』との関わりの中で読み解いてみる必要があると言えらるだろう。

三、小宰相の入水と『狭衣物語』

『右京大夫集』において小宰相の入水を語るにあたって用いられた「底の藻屑」が、『狭衣物語』では「入水した飛鳥井の女君」を象徴する表現であることを確認したが、そもそも、小宰相の入水はどのように描かれてきたものなのか。小宰相の入水は『平家物語』にも取り上げられる話だが、特にその経緯を詳述する延慶本『平家物語』巻九「通盛北方二合初ル事 付同北方ノ身投給事」によりまとめると、以下の通りである。

屋島に向かう船の中、通盛が湊川で戦死したことを聞いた小宰相は、「乳母子ナリケル女房」の説得もむなしく、海に身を投げた。入水を決意した理由の一つは、「心ニ任セヌ世ノ習ナレバ、不思議ニテ、思ワヌ外ノ事モ有ゾカシ」、生きながらえて別の男性と結ばれることへの拒絶であった。このとき、小宰相は懐妊の身であった。

この小宰相の入水の経緯は、飛鳥井の女君と類似する。前節で取り上げたように、筑紫行きの船上、狭衣との子を身籠もっていた女君が入水を決意した理由は、狭衣の従者・道成

に言い寄られたことによる絶望であった。『平家物語』の小宰相は、船上にいること、懐妊の身であること、別の男性と結ばれることへの拒否感、それゆえの入水の決意という点で、飛鳥井の女君と共通した描かれ方をしていると見える。

さらに、延慶本『平家物語』には、『狭衣物語』そのものが登場する。

（小宰相は）三位ノ筆ニテ書給タリケル猿衣ノ有ケルヲ取出シテ、アワレナル所ヲヨミテ、忍／＼ニ念仏ヲ申給ケレバ、（「乳母子ナリケル女房」は）「ゲニモ思延給ニコソ」ト心安ク覚テ、御ソバニ有ナガラ、チトマドロミタリケルヒマニ、ヤワラ舟ノハタニ立給タレバ、漫々タル海上ナレバ、月オボロニカスミワタリテ、イヅクヲ西トハワカネドモ、月ノイルサヲ山ノハニ向テ、掌ヲ合テ念仏ヲ申給ケル心ノ中ニモ……サテ念仏百返計唱テ、「南無西方極楽世界、大慈大悲阿弥陀如来、本願アヤマタセ給ワズ浄土ニ導給テ、アカデ別レシイモセノ中、一蓮ノ身トナシ給へ」トテ、千尋ノ底へ入給ヌ。

（延慶本『平家物語』巻九）
入水直前の小宰相を描いた場面であるが、彼女が最後に手にしたのは、通盛の書写した「猿衣」、すなわち『狭衣物語』であった。延慶本『平家物語』が小宰相の入水を描くにあたり、『狭衣物語』を意識していたことは明らかである。

こうした描写からは、小宰相の置かれた状況——西に向か

う船上、懐妊の身でありながら入水する——が、当時の人々にとつて『狭衣物語』を連想させるものであったことがうかがえる。小宰相の入水を伝え聞いた右京大夫もまた『狭衣物語』を想起し、「底の藻屑」と表現した可能性は十分考えられるのであり、『右京大夫集』における『狭衣物語』享受の例と認められるだろう。

共通点が見られる一方で、小宰相と飛鳥井の女君には決定的な差異もある。

『狭衣物語』巻一は、入水を決意した飛鳥井の女君が海の底を覗き見て、「ただ、かばかりにてだにも、いと恐ろしきに、わななくわななくうつ伏したまふめりとぞ。」（一五三頁）と、恐ろしさに震えるところで終わる。狭衣は女君が入水したものと思い込み、そのまま物語は展開してゆくが、巻二末尾に至つて、実は入水していなかったことが僧（女君の兄）の話により判明する。

「その人とはかりは見たまへしかど、身を厭ふ心深くうけたまはりしかば、髪なども削ぎやつしはべりてなん」とて、人々の聞くに、残りなくは言はじと思ひたるけしきなるを、我もゆかし、いみじと言ひながら、中将の向ひ居たれば、こまかに問ひ入らんもくだくだしきことどもなれば、ただ、「いかに海には入らずなりにけるなめり」と聞きたまふに……

〔『狭衣物語』巻一 一三〇三—一三〇四頁〕

このように、小宰相と飛鳥井の女君には、実際に入水したかどうかという点で決定的な差異がある。共通点のある（物語）の飛鳥井の女君に重ね合わせるも、肝心なところで重ならないのが（現実）の小宰相の入水であったということになるのである。

このことは、右京大夫も認識していたことと思われる。小宰相の入水について語った『右京大夫集』の左注部分を再掲する。

など申しし折は、ただあだごとこそ思ひしを、それゆゑ底の藻屑とまでなりしを、あはれの例なさは、よそにて嘆きし人に折られなましかば、さはあらざらまし。かへすがへす例なかりける契りの深さも、言はむ方なし。

（一六五・一六六番歌左注）

小宰相を、その共通点から（入水した飛鳥井の女君）を想起させる「底の藻屑」と表現したうえで、「あはれの例なさ」と評し、小宰相と通盛について「例なかりける契りの深さも、言はむ方なし」と締めくくっている点に注意される。入水して果てるといふ結末を迎えた小宰相について、短い左注の中で二度も「例」がないと評しているのである。この「例」がないという評は、右京大夫が小宰相と飛鳥井の女君の共通点だけでなく、差異にも目を向けていたことを示すものではないだろうか。小宰相の置かれた状況から『狭衣物語』を想起し、女君のように「底の藻屑」となったとなぞらえるも、（現

実)の小宰相は物語を超越しており、物語にも「例」がないほどの結末であったと評している、と解されるのである。小宰相の状況といくつかの点で共通しながらも、結末が決定的に異なる『狭衣物語』を引き合いに出すことで、右京大夫が見聞きした現実の出来事がいかに「例」のないものであったかを効果的に語ろうとしているとも言い換えられる。

右京大夫の『狭衣物語』享受は、単に類似した物語に重ね合わせ、なぞらえるというのではなく、その先にある〈物語〉と〈現実〉の差異まで見通したものであったと言えるだろう。こうした『狭衣物語』享受のありようからは、右京大夫が、物語という「そらごと」の世界を、自身の経験した現実の「例」にはなり得ないものと捉えていたことも見えてくる。次節では、こうした右京大夫の物語に対する認識を踏まえ、『右京大夫集』における物語享受の問題をさらに考えてみたい。

四、『建礼門院右京大夫集』と『源氏物語』

『右京大夫集』における『狭衣物語』享受の場面を通して、右京大夫の物語に対する認識の一端を指摘したが、『源氏物語』に関する同様のことは言えるのだろうか。『右京大夫集』は『源氏物語』の影響をさまざまな形で受けているが、本稿では、特に『源氏物語』そのものに言及する二つの場面を通して考えてみたい。

まずは、資盛の手紙を写経の料紙として漉き直した右京大夫が、『源氏物語』幻巻を想起する場面を再掲する。

……その折、とありし、かかりし、わが言ひしことのあ
ひしらひ、何かと見ゆるが、かき返すやうに覚ゆれば、
ひとつも残さず、みなさやうに認むるに、「見るもかひ
なし」とかや、源氏の物語にあること、思ひ出でらるる
も、「何の心ありて」と、つれなく覚ゆ。

(二一九・二三〇番歌詞書)

源氏が紫の上の手紙を焼却処分する場面を想起した右京大夫は、「何の心ありて」と、つれなく思う。この右京大夫の心境をめぐってはさまざまな解釈があり、「悲しみのさなかで、本来慰み物である『源氏物語』の一場面を思い起こしている自身への反省、このような悲嘆の底でも文学趣味から抜けきれない自身への一種の自己嫌悪^⑩」、「悲しみのあまり筆跡を見るのに耐えられず、手紙を全て焼いてしまった光源氏に比べて、自分は「つれなく」も恋人の筆跡を読んでいる^⑪」、そういう自分への嫌悪の情といった解釈が示されている。

傍線部に自己嫌悪、自己否定の感情が表れていることは確かだが、さらに前節で指摘した、物語を自身の経験した現実の「例」にならないものと捉える視点も見出せるのではないか。つまり、「何の心ありて」を「どういう心があつて（思い出したところで何の「例」にもならない『源氏物語』を思い出すのか）」と解釈し、それでも物語を思い出さずにはい

られない自分を「つれなし」と評していると読み解く、ということである。

そもそも、本場面の構造は先の『狭衣物語』享受の場面と類似している。最愛の人の死と手紙の処分という共通点から『源氏物語』を想起し、源氏の詠んだ歌を引くが、紫の上と資盛には病死と戦死という差異がある。この差異は、右京大夫にとっては決定的なものであつたらしい。資盛の訃報に接した折のことを記す場面を挙げる。

またの年の春ぞ、まことにこの世の外に聞きはてにし。そのほどのことは、まして何とかは言はむ。みなかねて思ひしことなれど、ただほればれとのみ覚ゆ。余りに堰きやらぬ涙も、かつは見る人もつつましければ、何とか人も思ふらめど、「心地のわびしき」とて、引き被き寝くらしてのみぞ、心のままに泣き過ぐす。「いかで物をも忘れむ」と思へど、あやにくに面影は身に添ひ、言の葉ごとに聞く心地して、身をせめて、悲しきこと言ひ尽くすべき方なし。たゞ限りある命にて、はかなくなど聞きしことをだにこそ、悲しきことに言ひ思へ、これは何をか例にせむと、かへすがへす覚えて、
なべて世のはかなきことをかなしとはかかる夢見ぬ人やいひけむ（二二三）
ほど経て人のもとより、「さてこのあはれ、いか

ばかりか」と言ひたれば、なべてのこのやうに覚えて、

かなしともまたあはれとも世の常にいふべきことにあらばこそあらめ（二二四）

天寿を全うした場合でも人の死は悲しいものなのに、戦死という形で資盛を失った悲しみは何を「例」とすればよいのかと述べている。こうした記述を踏まえると、右京大夫は「限りある命」ゆえに紫の上を失った源氏の悲しみを「世の常」のものとして捉え、源平の動乱ゆえに資盛を失った自身の悲しみとは決定的に異なるものと受けとめていたと考えられる。つまり、〈物語〉の源氏の悲しみは〈現実〉の右京大夫の悲しみの「例」にならないということであり、『狭衣物語』享受の場面と同様の物語に対する認識が見えてくるのである。「何の心ありて」は、『源氏物語』が右京大夫自身の経験した現実の「例」にならないことに気づいているからこそその自問と言えらるだろう。

続けて、『源氏物語』に直接的に言及する、もう一つの場面を見てみたい。

また、「維盛の三位中将、熊野にて身を投げて」とて、人の言ひあはれがりし。いづれも、今の世を見聞くにも、げにすぐれたりしなど思ひ出でらるるあたりなれど、際ことにありがたかりし容貌用意、まことに昔今見る中に、例もなかりしぞかし。されば、折々には、めでぬ人や

ありし。法住寺殿の御賀に、青海波舞ひての折などは、「光源氏の例も思ひ出でらるる」などこそ、人々言ひしか。「花のほひもげにけおされぬべく」など、聞こえしぞかし。その面影はさることにて、見なれしあはれ、いづれもと言ひながら、なほことに覚ゆ。「同じことと思へ」と、折々は言はれしを、「さこそ」といらへしかば、「されど、さやはある」と言はれしことなど、数々悲しとも言ふばかりなし。

（二一五・二一六番歌詞書）

維盛の入水を伝え聞いた右京大夫が、源平の動乱以前の様子を回想する場面である。維盛が後白河法皇の五十の御賀で青海波を舞った際に、人々が「光源氏の例も思ひ出でらるる」と噂し合ったと振り返っている。

「光源氏の例」は、紅葉賀巻で源氏が青海波を舞い、賞賛されたことを指し、続く「花のほひもげにけおされぬべく」は、花宴巻で右大臣家の藤の宴に出席した源氏の姿を描いた「花のほひもげおされて、なかなかことざましになん」(①三六四頁)などを踏まえる。この場面では、維盛の姿から源氏を想起した人がおり、右京大夫を含む「人々」に共有されてゆく過程が描かれている。「源氏物語」が「例」として機能した瞬間であり、右京大夫の本来の物語との向き合い方がうかがえる。

ここまで、「源氏物語」そのものに言及する二つの場面を取り上げ、右京大夫の物語に対する認識を確認してきた。物

語は元々「そらごと」であり、現実とは差異がある。源平の動乱以前の右京大夫も勿論、この差異に気づいていたはずだが、物語を「例」として、人々と共感し合うことに焦点を置いていたのだろう。だが、動乱により物語と現実の差異が拡大するにつれて、右京大夫の物語を捉える視点は変化してゆく。結果、『右京大夫集』編纂時に関心が向けられたのは、物語と現実の差異であり、物語を現実の「例」にならないものとして引き合いに出すことが試みられたのではなかったか。物語と現実の差異を痛感する右京大夫にとって、あえて「例」にならない物語に言及することは、自身の経験した現実——源平の動乱による恋人の戦死と社会の変化——が、いかに希有で苛烈なものであったかを語る手段の一つであったと言えるだろう。

五、建礼門院右京大夫にとっての物語

本稿では、小宰相の入水を語る場面に『狭衣物語』の影響が見られることを手がかりとして、右京大夫が物語をどのように捉えていたのかを考えてきた。物語を自身の経験した現実の「例」にならないものと捉える視点は、『狭衣物語』だけでなく、『源氏物語』享受の場面においても見出すことができる。そもそも、この「例」がないという認識自体は、源平の動乱を描く『右京大夫集』に通底するものであり、右京大夫の物語享受のありようにも反映されていると見るべきで

ある。

物語に精通していた右京大夫にとっては、物語を「例」として想起すること、物語になぞらえることこそが、本来の自然な行為であったはずである。源平の動乱により変化してゆく中にあっても、まずは慣れ親しんだ物語に「例」を求めたことだろう。だが、物語はもはや「例」とならず、自身の経験した現実の出来事がいかに希有であるかを突きつけるものでしかなかったのではないか。そうした中で、右京大夫の物語享受は、「例」にならない物語を拒絶するのではなく、あえて引き合いに出し、自身の経験した源平の動乱がいかに希有な出来事であったかを語る方向へと向かっていったのだと思われる。

『蜻蛉日記』は、その冒頭で、「そらごと」であるにもかかわらず、もてはやされている「古物語」に対し、「天下の人の品高きやと問はむためし」にもなる自らの希有な経験を、「日記」として書くと言言している。序ゆえに芝居がかったところはあっても、物語へのある種の対抗意識が日記執筆に向かわせたことと解される。右京大夫の場合も、『蜻蛉日記』のように、物語に対する意識が家集編纂に向かわせた、と見ることはできないだろうか。「例」にならない物語は、自らの経験が希有なものであることを突きつけると同時に、書き残すべき価値あるものであると気づかせた、と捉えてみるということである。このように捉えれば、右京大夫にとつ

て物語とは、家集編纂に向かう原動力の一つであったと言えるだろう。

なお、本稿で言及したのは『右京大夫集』に見られる多様な物語享受の一部である。取り上げるべき問題は多いが、今後の課題としたい。

【注】

- (1) 『右京大夫集』と『源氏物語』の関わりについては、諸注釈で指摘されるほか、多くの論考で論じられている。遠田晤良「建礼門院右京大夫の源氏物語受容」(『比較文化論叢』一、一九九八年三月)、谷知子「建礼門院右京大夫集」と『源氏物語』(『中世和歌とその時代』笠間書院、二〇〇四年、初出は二〇〇二年)、久保貴子「建礼門院右京大夫集」の『源氏積』『源氏物語』引用―表現の基底にあるもの―(『実践国文学』八十、二〇一一年十月)、大倉比呂志「建礼門院右京大夫集」と『源氏物語』(『日記文学研究誌』十八、二〇一六年六月)、三村友希「建礼門院右京大夫集」の幻視する『源氏物語』の世界―記憶にくるまれる右京大夫―(『源氏物語』の交響Ⅲ―新典社、二〇二〇年)、横溝博「建礼門院右京大夫集」と王朝物語の関係について―「たぐひなき」ためしなき―体験の叙法―(『建礼門院右京大夫集』の発信と影響―新典社、二〇二〇年)、大倉比呂志「建礼門院右京大夫集」と『源氏物語』(『源氏物語』からの撰取の状況―『建礼門院右京大夫集』の発信と影響―新典社、二〇二〇年)など。

- (2) 『右京大夫集』と『山路の露』の表現に共通性が見られるこ

- とが指摘されており、右京大夫を「山路の露」の作者とする説もある。本位田重美「山路の露」の作者〔『國語國文』二四―一二、一九五五年十二月〕、原岡文子「山路の露物語」(体系 物語文学史) 第五卷、有精堂出版、一九九一年、横溝博「山路の露」の成立―建礼門院右京大夫集』『正治初度百首』との関わりをめぐって―〔『平安朝文学研究』十五、二〇〇七年三月〕 参照。
- (3) 糸賀さみ江校注、新潮日本古典集成『建礼門院右京大夫集』(新潮社、一九七九年) 頭注など。
- (4) 久保田淳校注、新編日本古典文学全集『建礼門院右京大夫集』(小学館、一九九九年) 頭注。
- (5) 安道百合子「中世王朝物語における「底の水屑」表現の検討―入水譚の変容をたどりつつ―」〔『国語の研究』四四、二〇一九年三月〕は、『狭衣物語』において「底の水屑」が飛鳥井の女君を指し示すことばとして機能していることを指摘し、中世王朝物語における飛鳥井の女君の入水譚の影響について考察している。
- (6) 「底の水屑」と「底の藻屑」の本文異同については、野村倫子「狭衣物語」飛鳥井遺詠の異文表現―「底の水屑」と「底の藻屑」から紡がれる世界」〔『狭衣物語 文の空間』翰林書房、二〇一四年) に考察がある。
- (7) なお、「底の藻屑(水屑)」は、『狭衣物語』にもう三例見られる。いずれも飛鳥井の女君と関わる表現として用いられている。
- ・道季が思ひよりしことの後、いとど底の藻屑までもたづねまほしき御心絶えざるべし。(巻二 一九二頁)
 - ・かの「底の藻屑」と書きつけたたりし扇見つけたまへりしかば、尽き果てぬと思されし涙も、残りある心地してぞおほえけるや。(巻三 五四頁)
- ・人は、底の水屑とこそは聞きないたまはめ……(巻四 三九八頁)
- (8) 横井孝「女人哀話考―小宰相と建礼門院と」〔『平家物語 説話と語り』有精堂出版、一九九四年) は、延慶本『平家物語』の本場面に對し、『狭衣物語』巻一で、道成に言い寄られた飛鳥井の女君が狭衣の扇を手にし、その筆跡を眺めて思慕する場面を挙げ、小宰相の姿と重なることを指摘し、「こうした場面を引き、こうした描写を撰ぶためには、語り手とともに享受者も王朝物語の世界に親炙していなければなるまい」とする。
- (9) なお、『源氏物語』では手紙を焼却するのに対し、『右京大夫集』では経紙に漉き直させている点については、吉海直人「消息を経紙に漉き直す」話―シンポジウム遺文―〔『古代文学研究 第二次』四、一九九五年十月〕、辛島正雄「幻」卷異聞―『無名草子』の評言から―〔『徳島大学教養部紀要(人文・社会科学)』二四、一九八九年三月) などの論考がある。
- (10) 前掲注(4) 注釈書頭注。
- (11) 谷知子校注、和歌文学大系『建礼門院右京大夫集』(明治書院、二〇〇一年) 脚注。
- (12) 後年、後鳥羽天皇に出仕した右京大夫は、三十一歳という若さで急逝した源通宗を追悼する歌に続けて、「限りありて尽くる命はいかがせむ昔の夢ぞなほたぐひなき」(三五三)、「露と消え煙ともなる人はなほはかなきあとをながめもすらむ」(三五四)、「思ひ出づることのみぞただためしなきなべてはかなきことを聞くにも」(三五五)と、三首の和歌を詠んでいる。若くして亡くなつたにせよ、天寿を全うした通宗に對し、戦死した資盛の悲劇は「例」がないものであるという意識が現れており、生涯、資盛の死に對

する捉え方が変わることはなかったことが分かる。なお、横溝博前掲注（1）論文も、『源氏物語』幻巻享受の場面について、『右京大夫集』二二三～二二五番歌を挙げ、「いかに悲嘆の限りを味わったといっても、紫の上を失った光源氏と、戦乱で資盛を失った右京大夫とは、虚構と現実という決定的な差を度外視しても、比較にならないものであった」とする。

（13）平家の都落ち以降を記した『右京大夫集』後半部（二〇五～三五八）には、「例なし」や「言はむ方なし」など、「例」がないことを表す言葉が多用されている。これらは、主に源平の動乱によりもたらされた事態に用いられる。豊田恵子「建礼門院右京大夫集に関する一考察―感情表出語を視点として―」（『日本大学人文科学研究紀要』三四、一九八七年三月）参照。

本文の引用について、『建礼門院右京大夫集』『源氏物語』『蜻蛉日記』『狭衣物語』は新編日本古典文学全集に拠る。延慶本『平家物語』は『校訂延慶本平家物語』（汲古書院）に拠る。

【付記】

本稿は、第16回ヨーロッパ日本研究協会国際会議（二〇二一年八月二十七日 オンライン）における口頭発表をもとにまとめたものである。発表の席上及び発表後に御意見、御教示を賜った諸先生方に御礼申し上げる。

本稿は、JSPS科研費20K06320の助成による成果の一部をまとめたものである。

（たんげ・あつこ 明石工業高等専門学校講師）